

中国情報

中嶋嶺雄

「まごまごはナゾを言った中国共産党十
全大会から一カ月。党大会で予告された
全国人民代表大会がいつ開かれるのか、
内外の観測家たちは一斉に注目してい
ようだが、中国関係の情報は、しばしば
センセーションナルにあつかわれすぎるた
めに、かえって肝腎な問題点がみすゞ
れてしまつてよまゝある。

こんどの十全
大会に於いて
いと、王洪文

る、王洪文の「党規約改正についての報
告」そのものについては、この報告の入
魂が各紙とも朝刊原稿締切り間きわた
たこともあつてか、きわめて不完全に
か新聞では伝えられなかつた。
と」が、その王洪文報告のなかに、
次のようなギクリとする一節があるので
ある。「路線にかかわること、大同に
かかわることでは、真の共産党員は

・党副主席の流
星的出现は大い
に脚光を浴びた

王洪文報告が含む深刻なナゾ

林彪の反逆たたるる？

公につくす心を用いて、免職をおそれ
ず、党からの除名をおそれず、入獄をお
それず、殺害をおそれず、離婚をおそれ
ず、敢然と潮流にさらわなければなら
ない」(柳京、筆書)

右の箇所は中国共産党の内閣闘争がい
かに熾烈なものであるかを示唆するに余
りある。それにしても、林彪批判一魚の
党大会の、その林彪関連事項削除のため
の党規約改正報告のなかで免職、除名、
入獄、殺害、離婚をおそれず潮流にさら

らう言、それが真の共産党員といわんば
かりのこの表現は、あまりに刺激的な
ものだ。

免職、除名、入獄、殺害、離婚という
結末になつたのはほかでもない、林彪と
の集団なのだ。か、読み方によれば、
林彪の反逆をたたるるるのかのような表
現をなせのうな場であつたの
であつたか。

周恩来政治報告とヒソリックな手
に激し、表現で林彪とこの集団の罪状を
糾弾してゐるにたいし、王洪文報告は

意味に林彪批判のトーンが低いこと一
識して明白だ。

もしかすると、林彪異変は、その公表
された筋書きとは大きく異なつて、毛沢
東体制下での周恩来と林彪との死活的闘
争であり、林彪らは、周恩来らの行政官
僚と旧派権派勢力の連合のもとで「予防
クーデター」的に失墜していったのでは
ないか、という仮説が成立する。毛沢東
は、本来、これまでの事実経過とおりに
林彪を後継者に指定したのだが、周が林

に勝つた、現実
のなかで、その立
場を保つことがで
きなくなつたり、大勢
に促されるを得な
くなつたのではな
いか。

しかし、権勢は
しかし、権勢は
周恩来勢力の全面的優位とまでにはお
いたらす、王洪文は今日の勢力関係のな
かで、毛沢東が認知した急進派の代表と
して登場したのではないか、という仮説
である。

この仮説を採用するや、林彪異変をめぐ
る多くのナゾを解けるし、今回の周恩来
報告が周恩来らからぬ、革命主義の
ボーズをあえてついでに観があること
への疑問にも答ふられよう。しかし、も
とより真相はまた判じがたい。

(東京外大助教)